

■ 研究所だより

細越 雄二

私の先輩でもある友人が日商簿記検定1級に3回目の受験で合格しました。友人は、公認会計士と税理士を目指していて、そのステップとして、日商簿記1級(と全経簿記検定上級)を受験していたものです。日商簿記検定1級の試験は年に2回受験できる機会があるとはいえ、出題範囲がとても広く、さらに毎年会計基準が変更になるため、合格することは決してたやすいことではありません。何度も受験していてもなかなか結果が出ず、途中でつらい勉強をあきらめてしまった人は数多くいます。でもその友人は、大きな目標に向かって、仕事と勉強を両立させながらコツコツと地道に勉強を継続した結果、ついに合格することができたのです(その後、全経簿記検定上級にも合格しました)。

最近是这样した地道に努力を続けることを必ずしもよく思わず、合格するためのテクニックばかりを身に付けて、物事の本質を理解せずに合格しさえすればそれでよしとする(すなわちプロセスよりも結果を重視する)風潮があるように思われます。テクニックもある程度は必要だろうと思いますが、合格後にどのように進んでいくのが大事なのではないでしょうか。

変化の激しい今の社会では、すぐに結論を出すことが求められがちになります。しかしそれでは物事の表面的な理解はできて

も、本質には決して到達しないでしょう。私もよく考えもせずによく答を求めてしまうことがあり、いつも反省するのですが、日常に生じる問題は簡単に正答を出せるようなものであるはずもなく、むしろ答があるのかどうかさえ分からない方が多い。だからこそ人々は、これまで自分の頭で何時間も、何日も、場合によっては何年も考え抜いて答を見出してきたのだと思います。

また、これと関連して、物事を白か黒かをはっきりさせて解決しようという動きが強くなっているのではないかと懸念します。少し考えてみれば、複雑に利害がぶつかる世の中では常に白黒に分けて解決できるわけではなく、両者の間に落ち着くことにならざるを得ないことがあります。あいまいな印象がしますが、実は両者のバランスを上手に取った策だと考えれば、最善ではないにせよ、多くの人にとって最良の策だと考えることができるのではないのでしょうか。国や自治体の政策決定の場ではこうして利害調整が図られてきた面がありますが、常に二分法で政策を決めるようになると、一方の考えを一切受け入れなくなり、大変危ういやり方となる恐れがあります。まずみんながよく考え、本質を探る努力を一步ずつ継続して、議論を重ねていくことが利害調整の王道だと思います。